

たまゆら

京都府

百号を超えた『たまゆら』

「たまゆら」という語句は「玉響」と万葉集にも記載されている雅語で、珠玉が触れ合い、一瞬かすかな音を発すること、の意である。小誌命名の折「はかなくもささやかに」と人生そのものに重ね合わせながら、多分この雑誌もそうなるだろうと予感していた。

ところが、令和二年四月時点で第一一七号にまで達したのである。その原動力といえば、いうまでもなく私の文学熱であり、まとめた冊子を世に遺そうとする執念に他ならない。そこに至るまで幾つかの節目とか契機があった。私が二十代で同人誌『関西文学』に入会したこと、そこに拠る有力同人を誘って『半獣神』を創刊したこと、平成元年に毎日新聞社を繰り上げ定年退職した後、大阪文学学校の講師に就いたことなどが挙げられる。

当初は摂津市で読書会や文章教室を開き、程なく会員の短文を集めて、平成二年に小冊子『たまゆら』を発刊した。かくして種子は播かれたのである。時経て節目節目で、少なからぬ文学愛好者と出会い、次々と同人が加わり、また

去っていった。今回受賞された桑山靖子さんも大阪文学学校で知り合った一人である。『たまゆら』を主宰しながら、同校の講師を十年、文芸誌『樹林』の同人誌評子を十一年、大阪芸術大学の講師を三年務めて勇退した。

私は結婚後の家庭事情で摂津市から高槻市へ、更に東近江市へと転居を重ね、その間も営々として『たまゆら』の発行に努力すること三十年近く、何かと曲折があり、辛苦のほど、エピソードの数々など筆舌に尽くせるものではない。

『たまゆら』のモットーとして簡潔に「より高く より楽しく」を標榜した。小説が中心だとしても、雑誌というからには五目飯、幕の内弁当の旨味がなければと常日頃から唱えていたので、随想や思索的色彩の濃いエッセイ、評論、詩、俳句、短歌、戯曲などあらゆるジャンルを受け入れている。

現有同人の内訳は創作同人、購読同人、特別購読同人併せて二八名、切磋琢磨の好機となる合評会は欠かさず、私は第一一四号まで季刊で主宰、それ以降は京都の中川一之さんが年三回発行で編集代表を務めている。本号に転載された桑山靖子さんの「当麻曼陀羅」は、私の主宰役最後の第一一四号に発表された力作である。彼女とは前述した通り大阪文学学校時代に接点をもっていて、彼女は古典文学や芸能を素材とした作品の多い中長篇派、著書に「能面」



合評会にて同人メンバーと

（鳥影社刊）がある。

なお、同人の文学活動でつけ加えるなら、有志それぞれに単行本上梓がある他、榊原隆介さんの「内田百閒文学賞」、杉本増生さんの「関西文学賞」「神戸エルマール文学賞」、私はかつて『文藝界』『すばる』『季刊文科』に作品を発表したことがあり、「北日本文学賞」（選者・井上靖）「神戸エルマール文学賞」を受賞した。

同人誌の世界にも高齢化の波が押し寄せている。それには知的遊戯の側面があるにせよ、やはり文学樹の根となっているのは明らかであり、活字文化が衰えれば文化は廃る、と強調しておきたい。その点、『文芸思潮』は私たちに与っては得がたい応援軍、私も平成二十三年に第八回「銀華文学賞」佳作を頂いた御縁があり、今回の桑山さんの快挙を得て、ますますその感を深くした。

ドストエフスキーは長篇「未成年」の中で「人間というものには実に複雑な機械で、ときとすると何が何やらわけのわからぬことがある」と記している。まことにその通りなのだが、さればこそ例えば純文学なら、人間という未開の密林へ、未知の巨峰へ新機軸の文体で挑もうとするわけである。そこに途方もないむずかしさと、えもいわれぬ面白さがひそんでいるといえよう。私如きはそれらの麓でうろつくばかりだけれども、いつも痛感するのは、私にとって自作を活字にするという行為は他に代えがたい生甲斐、達

成感が得られるということだ。それでいて同時に、「言葉というものは何と不完全なのだろう。それ故に言葉を探せ、但し書き急ぐな」という自戒の念は忘れたくない。ちなみに、私がお気に入りの章句の中に、ガストン・バシユラーの「文学的イメージは新たな夢幻性で豊かにされなければならない」とか、開高健の「文章はメリ、ハリ、テリ、ツヤの四つ」などがある。

現代社会に孤立化と平準化、敢えて言えば映像化も進みつつある。時あたかもコロナ戦争が生起した。この人類共通の敵に対して、今こそ万国が一致団結して世界平和への糸口を見出すべきではないかと思う。せめて私に出来ることはと問いかけてみて、小誌に「同人誌寸評」の連載を決定した。これからは私は珠玉の才を探る旅、創作者にエールを送る旅を続けるだろう。

(前主宰／佐々木国広)

たまゆら 新代表・中川一之
〒612・8358

京都市伏見区西尼崎町八九〇・二 中川方

電話 075・622・3448

Mail = abbeyroadkaz@gmail.com



書斎の佐々木国広前主宰